

主日の福音 2025/10/5(No.1377)

年間第 27 主日 (ルカ 17:5-10)

からし種一粒の信仰は絶大な信仰のこと



過ぎた週は、恒例の司祭団ソフトボール大会に佐々町に出かけておりました。予選を一試合、そこで勝ったので午後から決勝戦を一試合。結果、上五島下五島連合チームは優勝しました。そう言うと思うに違いありませんが、私は五回組まれたチームの練習に一度も参加できず、当日の試合に代打で一度ずつ立たせてもらっただけです。

ただ、決勝戦の代打では奇跡が起きました。打ったのではなくて、相手のエラーを誘ってサヨナラ勝ちに繋げたのです。五回をめぐりに試合をするのですが、決勝の相手の佐世保平戸連合チームにずいぶん打たれて最終回の攻撃は 12 対 8 から始まりました。後攻の私たちは敗色濃厚ですが、あれよあれよと打者がうしろに繋いでくれて、12 対 11 まで追い上げたところで上五島の鳥瀬地区長神父様が長打を打ちました。

「これでサヨナラ勝ちだな」と思ったのですが、一人は生還したのですが一人は三塁で自重し、満塁となりました。12 対 12 のツーアウト満塁になったところでヒゲの監督の川原神父様が「代打・下五島地区長」と告げたのです。「何で俺に回すとや？」と思いつつも、「しかし打てばヒーローだな」という思いもあり、初球を狙おうと打席に立ちました。初球は天井に届くくらいのボール球でしたが、天井の電球をたたき割るようなバットの振りかたでボールに当てて、案の定、ボテボテのピッチャーゴロになりました。

しかし、最後まで何が起こるか分かりませんね。懸命に一塁に走ったら、第一試合でもそうだったのですが、割合足が速いものですからピッチャーが急いで一塁に投げようとして暴投してしまい、相手のエラーで三塁走者が生還し、13 対 12 で決勝戦を制したわけです。メンバーは大喜びでしたが、私は恥ずかしくて、その輪に加われませんでした。そんなわけで、来年の下五島大会まで、優勝旗を福江教会で預かります。

今週の福音朗読で、主人に命じられた務めを果たす僕に「言いなさい」と告げるイエスの言葉が身に染みます。私は何度か、養殖業の船に、見学で乗せてもらったことがあります。養殖魚の餌巻きは、定期的に、計画的に行われます。船で一定の量の餌を撒くと、ほとんどの魚が争って餌を食べます。この仕事を任せられた船員さん、船長さんは、命じられたことを忠実に、すべて果たしますが、だれも威張ったり、得意になったりしません。むしろ、イエス様のことばを喜んで自分に当てはめるでしょう。「しなければならぬことをしただけです」。

もちろんその仕事の中にも、どの魚があまり餌を食べなかったとか、どのいけすはふだんと違っていたとか、ちょっとした変化も見逃さずに報告します。魚が湧いている様子に興奮している見学者とは大違いです。それでも、イエス様が「言いなさい」と勧める言葉は控え目です。「わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならぬことをしただけです」(17・10)。

それ以上言わなくても、主人がすべてを知っている。その信頼関係が、イエス様の「こう言いなさい」ということばの中にあるのでしょうか。同じ 24 時間で、一人は三倍以上の働きをし、一人は半分以下の仕事しかしない。そんな労働者が職場にいるとしましょう。三倍以上働いた人が「しなければならないことをしただけです」と言うなら、きっとその労働者には雇用者に対する深い信頼があるのだと思います。

2025 年 4 月 21 日、カトリック教会ではフランシスコ教皇が逝去されました。遺言に、「墓碑にはフランシスコとだけ彫ってほしい」と遺されたそうで、その通りに、質素な墓に「FRANCISCVS」（V は U の意味）とだけ記されているそうです。初めての南米からの教皇様、バチカンでは矢継ぎ早に改革を推し進め、一方では声を上げることのできない人や、人間に破壊されるがままになっている地球環境のために叫びを上げ、在位 12 年で数多くの結果を残されました。

控え目に言っても、三倍以上の働きをなさった方ですが、墓碑には何も書き残しませんでした。イエス様への深い信頼がそこにはあります。「わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならないことをしただけです」。イエス様は一つも見落とさずに、今フランシスコ教皇様を懷に置いてくださっているのだと思います。

事あるごとに私は、「この世を旅立つに当たって、イエス様のたとえ話の登場人物の一人を生き抜くとか、イエス様のことばの一つを生き抜くとか、そうした信仰の一生を携えて旅立つべきです」と言っています。婚礼の席で、水がぶどう酒に変わる「しるし」がおこなわれる。水を汲んで瓶に入れた使用人は、このぶどう酒がどこからもたらされたかを知っていましたが、言われたとおりに宴会の世話役に運び、それ以上何も付け加えませんでした。

強盗に襲われた人を介抱し、宿屋に泊めてあげたサマリア人は、名前も告げずに助けてもらった人と別れます。最後の晚餐の時、重労働である水汲みをする人も、食事の席が整った頃には舞台から去っています。聖書のたくさんの人物が、「わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならないことをしただけです」を実行していながら、何も知らせずに舞台の袖に消えていくのです。それでも、神様は彼らがしたことを何一つ忘れることなく、報いてくださいます。

もし、この信仰を一言で言うなら、「からし種一粒ほどの信仰」ということになるでしょう。見た目が目立つわけでもなく、気付かれもしませんが、神様はこの信仰の持ち主に答えてくださるのです。「からし種一粒ほどの信仰」は、「ごく小さな信仰」と言うよりは、神が自分を覚えておられるという「絶大な信仰」のことなのです。

年間第 28 主日(ルカ 17:11-19)